吹き抜ける西の風

白眉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吹き抜ける西の風

【Ｎコード】
Ｎ６０２９Ｐ

【作者名】
白眉

【あらすじ】
お家の跡継ぎのための修行。赴いたのは川神の地。
待ち受ける強者とは？歩ゆく二人の運命（日常）はいかに！？

プロローグ？（前書き）

活動報告に書いたのに投稿しました・・・

否でも、ちゃんと“は”って言いましたよ？

では言い訳もここらへんで、プロローグどうぞ～

プロローグ？

「いや～、楽しみだね！」

行きかい、すれ違う人がちらほらと増え始める、そんな早朝の商店街。

そこを満面の笑みで歩く、深緑の髪の少女。

「遊びに行くんとちゃうやろ？もうちっと落ち着きぃや」

その少女の一歩後ろで、深紅の髪の少年が右手に持ったキセルを吹かしながら、呆れるように言う。

「だって！あの『東の剣聖』に会えるかもしれないんだよ！？」

少女は無邪気に、爛々と瞳を輝かせながら少年に振り返る。

「会える“かも”やんか。逆にそない落ち着きなかったら会ってくれへんと違うか？」

少年は止まる事を知らない少女のテンションに、半ば投げやりに答

えを返す。

「ダイジョブダイジョブ！！私だって本人の前ではちゃんと落ち着くからさ！」

「ウチとしては普段から落ち着いてて欲しいんやけどな・・・」

少年は少女の回答に、最早諦めたように呟いた。

「それに、学園長への挨拶もあるんやし、すぐに会える訳や無いで？」

「マジ！？よっし！じゃあとっとと挨拶済ませて会いに行こう！！」

少女はより一層意気込むと、街道を走りだす。

「無駄に元気なやっちゃ・・・・！！ヒメ！！」

「へ？」

少年の先を行っていた少女は、いきなり呼び止められ振り返る。

次の瞬間、いつの間にか少年が、少女の襟首を掴み後ろへと後退させる。「グエッ！？」と女性らしからぬ声が聞こえたが、彼は全く意に介さない。

「ゲホッ、エホッ・・・ちょっと！何すんのよ！？」

「助けられといてなんちゅう言い草や・・・ホレ、はよ立ちや」

「助ける？」

少年の言葉に、少女は理解できないと言った風に首を傾げた。

「ヒメ、さっきバイクに轢かれそうになったんやで？」

「マジで！？そのバイクは！？」

「謝りもせぇへんとそのまま走り去ってったわ・・・ったく、ここいらのガキは躾のなっとらへんのぅ・・・」

一方向に目をやり、苛立たしげにごちる少年。

「許せない！追うわよ！真護！！」

「は？何言うて・・・ってちょ！？ヒメ！！」

いつの間にか、少女は少年が見ていた方向へと、弾かれるように走りだしていた。

「ハァ・・・前途多難や・・・」

面倒くさそうに少年は頭を掻くと、風斬り音と共にその場から消えた・・・・。

「ひひひ！川神は無理でもそのツレはどうとでもなんだよ！！おいてめぇ！！あとで川神呼び出して土下座させるための餌になってもらうぜ！！役に立てよ！！」

そう言う、リーゼントヘアーの特攻服の人。僕は現在、この人のバイクの後ろに乗っていた。

バイクはぐんぐんスピードを上げていき、最早飛び降りることすらかなわない（と言うか僕にそこまでの勇気は無い・・・）。

「ま、まさかさっきモモ先輩にやられた人・・・！？」

「やられてねぇ！！フリだ！！作戦だ作戦！！」

やけくそ気味に声を荒上げるリーゼント。

でも正直そんな痣やコブだらけの顔で言われても・・・。

「いやでも顔ボッコボコ・・・」

「うっせぇ!!」

「わわわっ、ごめんなさいっ!!」

すごまれてつい謝ってしまう。

「・・・あ!ちょっと!!前!前!!」

バイクの前方に人影が。

このままじゃぶつかる!!

「邪魔だ!どけ!!」

いや、こんなとこ爆走してるあなたの方がよっぽど危険なんですけど・・・

しかし、ぶつかりそうになった人は、いきなり首を引っ張られる形で避けた。

何か「グエッ!?」って聞こえたけど・・・・

うぅ・・・このままだと大和達に迷惑が・・・・

「天・・・・誅――――――っ！！！！」

「！？」

「ぶべらっ！？」

いきなり聞こえてきた大声。見れば、何か布の棒みたいなものをバットのように振りかぶった女の子が、いきなり上から降ってきた（？）。

女の子はそのままバットのように棒を振るう。振るわれた棒が吸い込まれる様にリーゼントの顔面を捉え、リーゼントはなんか変な言葉を発してバイクから吹っ飛ばされた――――あれ？

「ちょっ！？こ、これどうすればいいの！？」

運転手を失ったバイクは当然、暴走し、そのままあらぬ方向へと突っ込んでいく。

「後先考えへんのも困りもんや・・・」

「は？」

・・・あ、あれ？僕はさっきまで、バイクの上だったはずじゃ？

それが何で、いつの間にか男の人にお姫様だっこされてるわけ！？

「あんた、どこも怪我あらへんか？」

「へ？あ、は、はい・・・」

関西弁で聞いてくる男の人。と言うかホントこの人一体。

「無事やったら、はよう降りてくれへん？ウチは男好きや無いさかい」

「ご、ごめんなさい！！」

そう言われ慌てて降りる。

「さてと、ウチの姫さんはっと・・・」

男の人が、辺りを見回す。

「な・・・なにもんだてめぇ！？」

苛立ちをはらんだリーゼントの怒声。

あぁ・・・ボコボコの顔が若干凹んでる・・・。

リーゼントの視線の先にいたのは、先程振ってきた女の子。

すらりとした体に、深い森のような緑の短髪。

「何もん・・・ねぇ？人を轢こうとしといて、随分な言い草じゃない？」

女の子は、加虐的な笑みを浮かべて、楽しそうに言う。

「いや、ぼけーっとしとったヒメにも原因はあるで？」

「うっさいわね！！」

男の人に突っ込まれて、女の子が赤面する。

「ざけんじゃねぇ！」

リーゼントが懐からナイフを取り出して、女の子へと突進する。

「！危ない！！」

「ええ度胸やんか」

「「！？」」

まただ。男の人が、今度はいつの間にかリーゼントの隣にいて、突き出した手をがっしりと掴んでいた。

「ウチのヒメに手ぇ出すんや・・・覚悟はあるんやろな？」

「くそっ！！離しやがれ！！」

リーゼントが必死にあがくも、きっとすごい力で掴まれているんだろう。一向に解ける気配がない。

「逝ねや」

男の人が放った回し蹴りが、リーゼントの顔面をより一層へこませた瞬間だった――――

プロローグ？（後書き）

はい、ありがとうございました。

作者の白眉です。

主人公の名前？それはまだ未公開です。時話あたりでちゃんと出します。

編入生二人　前編

川神学園――――

個性を重んじる自由な校則をはじめ、他の学園とは一味違う、個性的な行事や授業が満載の、川神市を代表する学園である。

ここの校訓は「切磋琢磨」。つねに上を目指すと言う、ハングリー精神バリバリなこの学園に、とある人影が二つ・・・。

「・・・うぅぅ～・・・・」

疲労感の混じった唸り声が、廊下に虚しく響く。

「はぁ・・・・こらあかんなぁ・・・」

続けて聞こえる別の声にも、困惑と疲れが滲み出ていた。

「「・・・迷った・・・」」

同時に困り果てた言葉を呟いた、緑髪の少女と深紅の髪の少年は、お互いに顔を見合わせて深々と溜息を吐きだした。

「何だってこんな事に・・・」

「いや、ヒメが“学園内を見て回りたい”言うたからやろ・・・」

ごちる少女に、少年は若干の呆れと共に答える。

そもこの二人、この川神学園の学園長に、とある用事で赴いていたのだが、途中で少女の方が、『せっかくだから学園内を見て回りたい』と言いだしたのであった。

「だって・・・こんなに人がいないなんて思わなかったんだもん・・・」

「確かになぁ・・・何かあったんやろか？」

そう言って、少年が誰もいない廊下を見渡す。

そう。現在廊下には、少女と少年以外は人っ子一人存在していなかった。

「まさか職員までおらんとわな・・・」

「何かあったのかな？」

あても無く歩きながら、がらんどうの廊下を進んでいく。

「・・・ん？」

ふと、少女の視線が廊下の窓ガラスへと移り、そのまま窓際へと近づいていく。

「どないしたんや？」

少年も、急に立ち止まった少女を疑問に思い、隣へと寄り添う。

「あれ・・・」

「人だかり・・・？」

ガラスに映っていたのはグラウンド。そこには円形の人混みができていた。

「何してるんだろ・・・？」

「ちょっと、行ってみよか？」

「うん！！」

少年の問いに、少女が嬉々として答えると、二人は小走りでグラウンドへと駆けて行った――――

「ほぉ・・・ありゃ組手か？」

「面白い事するね～」

ウチとヒメの視線の先、円形の人だかりの中央に対峙する影が二つ。

一つは、片手にレイピアを構える金髪の少女。もう片方は、身の丈を超える薙刀を構えた、赤毛の少女。

「相性で言ったら、薙刀の子が有利かな？」

中心の二人を見比べながら言うヒメ。

確かに、武器の間合いで勝る薙刀の方が、一見有利に見える。

「せやけど、あの金髪の子も弱い訳や無いやろうし、どうなるかは解らんやろな」

間合いを諸ともしないような武人なんて、世の中にはゴロゴロおる。

もっとも、初見であの子がそこまで強う見えた訳や無いけどな。

「それもそうね」

ウチの返答に、納得するように頷くヒメ。今のヒメでも、実力を測る事位はできる。

「っと、始まったみたいやで・・」

ウチの言葉を皮切りに、ヒメの視線がまた中央に戻り、ウチも組手の方に目をやる。

最初にしかけたのは、赤毛の子の方。持ち前のリーチを生かして、金髪の子の範囲外から薙刀を振り下ろす。

金髪の子も、負けじと反撃に移ろうとするも、如何せん間合いの差が大き過ぎる。間合いに入る前に振り回される刃に遮られてまう。

「おぉ～、あの金髪の子劣勢だね～」

「せやな。けど、このままやったらあの金髪の子の勝ちやね」

「まぁね。あっちの赤毛の子、攻撃が真っ直ぐすぎるもん」

ウチの意見に、ヒメが同意する。そう、今の所は赤毛の子が押してるんやけど、どうにも攻撃が単調過ぎる。

あれやったら、パターン読まれてあっさりと軌道を予測されてまう。

そう思った直後、金髪の子が攻めへと転じる。

迅雷を思わせるような速度の突きが、赤毛の子の攻め手を遮った。

ただ、反応が早かったおかげか、赤毛の子はギリギリで突きを回避する。そのまま後退して距離を取った赤毛の子。

何やら金髪の子と赤毛の子が言いあい、赤毛の子が薙刀を回転させ

始める。

恐らくそれは必殺の態勢なのだろう、回転する薙刀は、遠心力によってその速度をグングンと加速させていく。

それを見た金髪の子も、足を止め、迎え撃つ体制へと入った。

「次で決まるね・・・」

「せやな・・・」

恐らく、次の一手で決着がつく。緊張した空気の感触が、ウチら二人のとこまで伝わってくる。

均衡を破ったのは赤毛の子。

頭上に振り上げられた薙刀が、勢いそのままに振り下ろされる――かと思いきや、攻撃の軌道は斜めに走り定められた狙いは金髪の子の脚。

意表を突いた攻撃に、金髪の子は避けられへんやろう思った。

せやけど、金髪の子はそれを回避。避けられると思うてへんかったんやろう赤毛の子は体勢を崩し、そこへすかさず金髪の子が突きを放ち、その攻撃は赤毛の子の肩へと炸裂した。

一瞬の静寂、後に湧き上がる歓声。どうやら、この組手はこれにて決着のようやな。

「なんか組手って言うよりも真剣勝負って感じだったね」

「確かになぁ・・・」

多分、ヒメの言う通りやろな。

あの勝負を見る限り、お互いに手加減やらなんやらは無かった見たいやし。

「さてと、ほなウチらも戻ろか・・・」

見るもん見たし、はよ学園長に挨拶すまさなあかんしな。

ヒメと二人して、グラウンドに背ぇ向けて校舎に向かう。

「待て」

不意に呼びとめられて、振り返った先におったんは、黒の長髪をなびかせ、楽しそうな目ぇでウチらを見据えとる、長身の女の子――

――

ワン子と、２―Ｆへの転入生――確か、クリスって言ったけ？――の決闘が終わった。

結果は、クリスの勝利。

勝負も終わった事だし、早速ワン子とあのクリスって子を愛でてやろうと、二人に近づこうとする。

「――――ん？」

ふと、どこからか感じる視線。目で追っていくと、そこには二つの

人影があった。

一人は、ここいらじゃ見慣れない制服を着た、緑髪の短髪の女。遠くからでも、かなりの美少女である事が解る。

もう一方は、黒の燕尾服を着た、赤い三つ編み。来てる服からして、多分男だろうとは思うが、如何せん顔が女っぽくて判断に困る。

・・って、そうじゃなくて。

この二人が視界に止まったのは、単に来てる服が内の学園の制服じゃないことだけが理由じゃない。

緑髪はともかく、隣の燕尾服の気配に、妙なものを感じた。

まるで、敢えて隠しているような、そんな気配。

好奇心に掻き立てられた私は、一瞬の内にその二人の元まで跳んで行く。

「待て」

校舎内へ入ろうとした二人を呼び止める。

「えっと・・・ひょっとして、ウチらの事？」

「この状況でお前たち以外には居ないだろう？」

「そら・・・そうやろうけど・・」

私の返答に、燕尾服はいまいち納得しかねる様な反応をする。

が、そんな事は関係ない。

「私は今退屈していてな・・・少し相手をしてもらうぞ！！」

「なぁッ！？」

拳を構え、燕尾服へと殴りかかる。

「ハァァァアっ！！」

突き出した拳は一切の加減も無く燕尾服の顔面に迫る。

「くっ！！」

しかし、燕尾服は顔を逸らして拳を避ける。

「ほぅ・・良く避けたじゃないか。ならこれならどうだ！？」

拳を引き戻し、今度は連続で撃ち放つ。

「だぁあ、くそっ！しゃあないなぁ！」

悪態をつきながらも、燕尾服は私の拳撃を全て裁く。無論、加減なんてものはしていない。普通の奴には避ける事などできはしない。

数撃渡り合った後、互いに弾かれる様に距離をとる。

「ククッ・・・やはり辺りだった様だな・・・」

「随分血の気盛んやね・・・」

「言っただろう？退屈してるってな・・・さあ、もっと私を楽しませろ！！」

地面を蹴り、再び燕尾服へと肉薄する。

「そこまでじゃ！！」

いきなり、私と燕尾服の間に割って入る人影。

「じじぃ・・・」

「百代、何を勝手な事をしておる？」

「そこをどけ。やっと退屈から抜け出せそうなんだ・・・」

「喝っ！！だから待てと言っているじゃろうが！！まったくお前はいつもいつも・・・」

「あ、あの・・・・」

私とじじぃが言いあってると、燕尾服が戸惑いながらじじぃに声をかける。

「おぉ、すまんかったの。お主らが姫埜の者じゃな？話は聞いておる。来なさい」

「あ、はい。解りました」

じじぃが燕尾服と緑髪を引き連れて、校舎に向かって歩き出す。

「っておい！私との戦いはどうなる！」

「心配せんでも、時が来たらちゃんと用意してやる！！」

「チッ・・・・おい、お前！」

「・・・まだ何か？」

「まだ名前を聞いてなかった。お前、名前は？」

燕尾服は立ち止ると、私の方へと向き直った。

「真護。皇真護（すめらぎんご）や」

これが、私と奴の最初の遭遇――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6029p/

吹き抜ける西の風

2011年1月4日00時47分発行